

<資料1>

『母の昔語り』第3巻 2007年10月発行

序文

『母の昔語り』とのタイトルで母さんが書いた随筆も、これで3冊になります。第一巻を出した97年8月7日は、ルードウ・ウー・ラの15回忌。「ウー・ラの文学的功績をしのんでこのささやかな本を出したのです」と、その出版に至る事情について、そこで述べています。

『母の昔語り』第二巻は、第一巻の3年ばかり後に出しました」と著者の序で述べてあり、2000年に出版しています。

第一巻当時は、わたしの随筆が40編収められました。第二巻もわたしの随筆が39編められました。この第三巻には、もはや第四巻が出版できる見込みがないため、59編を収めています。

この2ヶ月近く、ドー・キャリア⁵⁰が発行する『キャリア』誌に「母の昔語り」のコラムが書けなくなっています。これから先も書ける見通しはあまりありません。版元に損失を出させてしまいました。母さんは92歳と3ヶ月になっているのです。ドー・キャリアは、母さんがもう書けないということは、まだ公けにしていません。ですから気の毒にドー・キャリアは、締め切りが来ても母さんの随筆が到着していなければ、以前書いたものの中から手ごろなものを探して、毎号掲載しています。そして母さんのところへ、原稿料だといっていつもどおりに送金してくれるのです。彼女がなぜそんなことをするかといえば、母さんの随筆が掲載されないと、『キャリア』誌の愛読者から、母さんは具合が悪いのですか、もう書けないのですかと、たずねられるのだそうです。ですから彼女は、そんな問い合わせから解放されたくて、以前のものを探して掲載しているのだといいます。それとて、母さんは彼女のところだから書いていたのです。ほかのところには、ずいぶん前から書けなくなっています。それが老いというものです。老いには、どんなに逆らっても勝てません。

自分のコラムですから、愛着はありますよ。自分なりの立ち位置で、自分の眼前に展開する、見るに耐えぬことがらのすべてから、若い人々を守る防波堤のつもりで書いてきたのですから。13年にもなれば、やはり愛着はあるのです。

ルードウ・ドー・アマー

<資料2>

ビルマの若い娘たちの民族服

『母の昔語り』第3巻 pp.159-160

『キャリア』誌 2006年10月号より転載

ビルマの女たちの民族服について語る場合、やはりそれはあつてしかるべきでしょうか。

⁵⁰ キャリア（ウェイザー・テイッパン）は1938年生まれで、1969年から短編小説を書き始め、長編単行本は100冊を超える。1985年『キャリア』誌を創刊し、多くの作家を育ててきた。ミステリーのベストセラー作家でもある。短編「こちらから見れば白 あちらから見れば黒」（1992）を[南田 2001c:pp.199-209]に収録している。

なくてもよいのだとお思いでしょうか。やはりあってしかるべきだというならば、下半身にタメイン⁵¹を着用することは定めるべきでしょうね。インド女性ですと、サリーが彼女たちの民族服ですもの。

このことは、今問題にせねばならないことです。民族服がやはりあってしかるべきか、もうなくしてほしいのかということ、論議せねばなりません。なんとならば、今、時代の先端に行く娘さんたちは、腰にタメインを巻かず、スカートやズボンをはいているからです。スカートというのは、タメインにあらずして、タメインもどきの衣服です。スカートで腰は覆われます。でもそれは、タメインのようにすっぽり覆い隠す安全な衣服ではありません。スカートの中には膝上までしかない短いものがあります。ひざ下までの丈のスカートもあります。太ももあたりまで切れ込みの入ったスカートもあります。中には、真後ろが割れたスカートまであります。今どきのビルマの若い娘さんたちがはくスカートには、太ももあたりまでの丈の短いスカートまで出回っています。大胆なひとたちがはいています。けれども、横が割れたのや、後ろが割れた長いスカートなら、大胆にもたいていのビルマの娘さんがはいている姿が見られます。

上半身はとなると、胸から上には何もありません。母さんたちの昔の頃は、女はタメインを胸元で締めたままで⁵²人前になど出られませんでした。今や、胸から下を覆っただけで、胸元の上の部分は丸出しのままで、小指の半分ほどの細い紐を肩に吊るすだけ。それで衆人環視の中を往来しているのですから、場所をわきまえないにも、ほどがありますよ。はるか祖先の昔から、母さんたちビルマの女たちには、「恥は命であがなう」という座右の銘がありました。恥をかかないことが命より値打ちがあるという言葉です。ですから、若い娘さんたち自身が気をつけるだけでなく、娘さんたちの保護者監督者ともども力を合わせて、正しく導いてやってほしいものです。

それから、タメインとスカートの違いについて、母さんは少し言っておきたいのです。タメインは、はいて動き回っているうちに、汚れや破れができてしまったら、その場所を折り込んで⁵³はきなおすことができます。汚れを隠すことができるのですね。スカートはズボンと同じで、どこが汚れようが破れようが、そこをたたみ込んでのはきなおすことなどできません。ですから、隠すということができないのですとも。

さらにいまひとつ、ビルマの娘さんたちがズボンをはくことについても、言っておきたいのです。険しい山野へ旅に出かける場合に動きやすいのがズボンですから、そのようなときにはくことについて、母さんは何も言いたくありません。でも、今どきの、都会のビルマの娘さんたちのズボン姿には、母さんはあつけにとられてしまいます。おへそを出してはいているのです。上着が短めですから、ズボン姿で背を丸めると、何色の下穿きをは

⁵¹ 女性用のロンヂーで、筒状の布の上部に黒の折込用部分に取り付けられている。筒の片側に体を入れ、ゆとりの部分を前でたたみ、上部を腰の中にたくし入れる。男性用はパソウと呼ばれ、両側のゆとりの部分を真ん中で結んで端布を腰の中に入れる。

⁵² 水浴時には上着を脱いでタメインを胸元まで巻き、そのまま体を洗った後、上から新しいタメインをかぶって、下から古いタメインを脱ぐ。水浴スタイルで人前に出ることははしたないとされる。

⁵³ タメインの柄は一様であることが多く、後ろ前もない。前でたたみ込む部分をそのつど変えることが可能である。

いているかまで見えて、たとえ家族の男たちの前であっても慎むべきはずの見苦しい有様を露呈していると聞きます。母さんたちのビルマの伝統的習慣では、娘さんたちの着る衣服は、「品位がある」という看板をかかげねばなりませんでした。装いを自堕落だとか放埒だとかいったものにさせてはなりませんでした。今や、わざわざ自堕落放埒な装いが選ばれ、身につけられているのです。母さんたちビルマの女には、隠すべきものがあります。やってよいこととよくないことがあります。どれがどれだか区別できないなら、母さんたちにこっそりお聞きなさい。今や、一部の若い娘さんたちは、隠すべきものを極めて露出したがっている状態にあります。これを時流に乗っている、現代的だと思っているのでしょうか。

このことでは、わが東洋と西洋は反対です。西洋の若い女性たちには、何はさておき男を魅惑する力が備わっていることが重んじられます。わが東洋はそうではありません。わが東洋の女たちは、西洋の女たちとは違います。わが東洋女性は、自分に備わった真の能力資質を用いて、やるべきことがあればそれをやることができます。その点で、我々東洋女性は西洋女性より優れています。あなた方若い女性が西洋女性と競いたいなら、その点を自覚するだけで十分だと言いたいのです。

現代、一部の娘さんたちは、母さんたちともの見方がずいぶんかけ離れています。たとえば、母さんたちが生まれてこの方受け継いできた考えは、「おへそ」というものが、女が露出すべきものではないということでした。しっかり隠しておかねばならぬものなのです。現代の娘さんの中には、このおへそをあらわにするだけではなく、金銀宝石で飾る人もいるといます。限りない驚きです。彼女たちの父親もこれを見て何も言わないといます。そこで、責められるべきはこの偉大なる時代なののでしょうか。大胆にも度を過ぎようになった人々なののでしょうか。それとも母さんが長生きしすぎたことなののでしょうか。もはやわからなくなりました。

<資料3>

ルードウ・ドー・アマーの人生と文学 年譜

『ルードウ・ドー・アマー生誕90年記念寄稿集』2006年11月 pp.10-16

- 1915 - マンダレー市ゴンダン地区にて、ウー・ティンを父、ドー・スを母として11月29日月曜日に誕生。12人兄弟の第4子で本名はアマー。
- 1920～23 - 中華地区女子民族学校で2学年まで就学。
- 1923～31 - 同校廃校のため第3学年から第9学年までABM学校にて就学。
- 1931～33 - マンダレー中央女子学校にて10学年を修了。
- 1933～35 - マンダレー・カレッジにて化学・物理・数学を専攻。
- 1936 - ヤンゴン大学文学部第3学年に進級。インヤー寮読書愛好会書記長。第二次学生ストライキに参加。『オーウェー<孔雀の鳴き声>』誌、『チープワーイエー』誌、『バーマ』ジャーナル等に小説、随筆等を執筆。チープワーイエー・ウー・ラと知己を得る。『チープワーイエー』誌にペンネーム「キンレーウィン」「ミヤミズー」等で執筆。
- 1937 - 文学部4学年の卒業試験で不合格となり退学。ミャンマー紙店を開店。

- 1938 - Maurice Collis "Trials in Burma"を『ビルマ国内で取り調べた事件』との題で翻訳出版。
- 1939 - 11月13日チープワーイエー・ウー・ラと結婚。
- 1940 - Maurice Collis "Sandamala"を『サンダーマーラー』⁵⁴との題で翻訳し、2巻に分冊して出版。
- 1942~44 - 第二次大戦中カバイン村⁵⁵に疎開し、出版事業を継続。
- 1945 - 6月、『ルードゥ』ジャーナルを創刊。副編集長を務める。Ashihei Hino "War and Soldier" vol.4 "Wheat and Soldier"を『麦と兵隊』⁵⁶との題で、Wanda Wasilewska "The Rainbow"を2巻に分冊して『虹の色』の題で翻訳出版。
- 1946 - 4月19日『ルードゥ』紙を創刊し編集部に入る。「パギン・アウンナイン」⁵⁷のペンネームで「政治討論」のコラムを担当。
- 1947 - ルードゥ・ウー・ラとともに、独立のためにリーダーシップを発揮する反ファシスト人民自由連盟（パサパラ）の論調を支持する立場から論陣を張る。
- 1949 - 『ルードゥ』紙と『チープワーイエー』の印刷機が設置された建物がダイナマイトで爆破される。Gunther Stein "The Challenge of Red China"を『共産中国の挑戦』との題で2巻に分冊して翻訳出版。
- 1950 - 1949年4月24日以来停刊の『ルードゥ』紙を11月1日に復刊。1946年5月以来休刊の『ルードゥ』ジャーナルを8月1日に復刊。ホーチミン大統領の伝記を出版。
- 1953 - 世界民主女性会議（コペンハーゲン 53年6月7日）、世界平和会議（ハンガリー・ブダペスト 53年6月15日）、第二回世界青年学生祭典（ルーマニア・ブカレスト 53年7月25日）に出席。Archie John Stone "In The Name of Peace"を『平和へと』との題で翻訳出版。ルードゥ・ウー・ラが第5条⁵⁸違反で逮捕されたため『ルードゥ』紙論説を担当。
- 1959 - 3月12日『ルードゥ』紙ひそかに停刊処分。
- 1960 - 5月10日『ルードゥ』紙再刊。
- 1962 - 2月3日エアロフロート便開通式にジャーナリスト代表として招待され、モスクワ訪問。帰途東ドイツ、チェコスロバキア、中華人民共和国訪問。

⁵⁴ 英国人画家とシャン族王家の血筋の娘の愛を描くものだが、娘の母サンダーマーラーは、深窓にありながら世界情勢に通じ、流暢に英語を話し、深い教養を備え、仏教教義を極め、易学にも長ける。[南田 2007:pp.60-61]も参照されたい。

⁵⁵ マンダレー郊外にあるこの村には 1942年4月末にタキン・ソウ、タキン・ヌ、テインパーミン、チョーニェインが集まり、アウンサンの伝言に基づいて今後の抗日闘争の方向を協議している。[南田 2001a:pp.50-51]も参照されたい。

⁵⁶ これについては日本占領期の 1944年に、すでにチープワーイエー出版社から第一巻出版の事実がある。日本占領期に出版された事実を出したくないためか、別の理由が存在するのか不明である。[南田 2010c:pp.116]も参照されたい。

⁵⁷ パギンは父を意味し、アウンナインは男性名である。すなわち男性名を筆名にしたということである。

⁵⁸ 1950年発効の緊急事態法第5条は、公序良俗、あるいは国家安全を破壊、または企図した個人・集団を対象とする。

- 1963 - ヨーロッパ紀行を『社会主義の国々へ』との題で書籍として出版。C.Wright Mills “Listen Yankees”を『おおヤンキーたち』、Anna Lewis Strong “Cash and Violence in Laos”を『金と武器』との題で翻訳出版。
- 1964 - 『国民に愛された芸術家たち』を出版。この著書により1964年サーペーベイマン<文学殿堂>賞⁵⁹を芸術関係部門で第一位獲得。
- 1966 - Edgar Snow “The Other Side of the River”を『立場の異なる中国』との題で2巻に分冊して翻訳出版。
- 1967 - 7月7日『ルードウ』紙廃刊処分。「アウンバラ」「ポウ・セイン」「セインカドン」⁶⁰らについての書籍を執筆出版。
- 1969 - 『シュエーヨウ・バガレー』を2巻に分冊して出版。風刺漫画家バガレー⁶¹の『金の一振り風刺漫画』へ補遺・序文執筆。
- 1970 - 『シュエーマン・ティンマウン』⁶²を出版。3月3日、マンダレーのクンターヤー論文発表会で「ビルマの絵画事業」との論文を口頭発表。
- 1971 - マンダレーのダンマベイマン<仏法の殿堂>で「今日のビルマの祝祭」との題で論文口頭発表。
- 1972 - マンダレー国際図書年論文発表会で「世界最大の書籍」との論文を口頭発表。
- 1973 - 『アニェイン』⁶³を2巻に分冊して出版。『世界最大の書籍』出版。
- 1974 - 『世界最大の書籍』をタントウン博士⁶⁴が“The World’s Biggest Book”の題で英訳出版。
- 1975 - 『黄金の孔雀の羽根ペン評論集』出版。
- 1976 - 『タキン・コウドー・マイン先生』⁶⁵出版。8月19日『ハンダーワディー<モン族の王国名>』紙の「土曜の文学サークル」論文発表会で「伝記文学」を口頭発表。
- 1978 - 8月21日、ルードウ・ウー・ラ、息子ニェインチャン（ニープレー）とともに1年1ヶ月1日間拘禁される。

⁵⁹ ビルマ首相を会長とするビルマ翻訳文学協会が、1948年独立の年に出版された長編小説を対象に授与したのが最初である。現在は民族文学賞として存続している。

⁶⁰ アウンバラ（1881-1913）は伝統芸能の一ジャンルであるザッ（舞台劇）における女形役者であった。彼と組んだポウ・セイン（1882-1952）は歌舞の才と容姿に恵まれ、1910年に一座を結成し、斬新な装置や振り付けで野心的な舞台を展開し、30年代の演劇黄金時代を築いた。セインカドン（1875-1930）は12歳より舞台に立ち、1890年より一座を組んで全国を巡業し、王子役で人気を博した。

⁶¹ 1892-1944。風刺漫画のほか、映画俳優や監督も兼業した。

⁶² マンダレー生まれのザッの役者で、第二次大戦直前から名を成した。

⁶³ ビルマ伝統芸能の一ジャンルの名称である。マンダレー王朝時代宮中で生まれ、女性の座唱とソロ舞踊から成ったが、植民地時代、歌手、踊り子、楽団、道化を加えて発展した。仏塔祭や喜捨祭など地域・個人・集団の祭事の出し物として上演され、現代に至る。

⁶⁴ 1923年生れのビルマ有数の歴史学者で、2005年11月ドー・アマー90歳の誕生日を祝う集まりに出席した日の夜、マンダレーで急死した。

⁶⁵ 1875-1964。戯曲作家、新聞記者、愛国詩人として名を馳せる。日本占領下で枢密顧問官、戦後ビルマ世界平和評議会議長、作家協会会長を務め、1954年スターリン平和賞を受賞している。

- 1979 - 8月22日、拘禁から解放され、Chester Ronning “A Memoir of China in Revolution”を『わが回想 革命中国』の題で翻訳出版。
- 1982 - 8月7日、43年間連れ添ってきた夫ルードウ・ウー・ラ死去。
- 1984 - 3月4日、マンダレー大火でチープワーイエー出版社、印刷所、用紙倉庫、書籍倉庫が燃焼。
- 1985 - 11月29日、満70歳となり、この年以來アマラプラ⁶⁶のタウンレーロン寺院にて誕生を祝う会を毎年開催。『チンドウイン川から大海へ』を出版。
- 1989 - 5月27日、『国民に愛された芸術家たち』出版25周年をアマラプラのタウンレーロン寺院で開催。『ビルマの古典音楽』『アフリカ短編小説集』出版。
- 1990 - ルードウ・ウー・ラとの共著『煙草と人間』出版。
- 1991 - 『ダナ<資本>』誌に連載した随筆をまとめて『マンダレー人たち』の題で出版。
- 1992 - 『ヤナンティック<芳香>』誌に「ザンブーディーパ・アウントウン」⁶⁷のペンネームで国際関係の随筆を掲載。『タイ短編小説集(1)』出版。
- 1993 - 雑誌等に掲載した随筆をまとめて『王都マンダレー・マンダレー・私たちのマンダレー』出版。『タイ短編小説集(2)』出版。
- 1994 - 『仏法のともし火となった僧正たち』出版。『黄金の孔雀の羽根ペン随筆集』を日本で翻訳出版⁶⁸。訳者土橋泰子(ビルマ名ドー・インインミヤ)新宿書房2780円。79歳誕生日を記念して『私の若い頃の自伝』出版。
- 1995 - マンダレー市中央民族学校同窓生主催第75回「民族の日」⁶⁹75周年記念誌編集長を務める。『世界最大の書籍』第5版出版。
- 1996 - 『世界最大の仏像』出版。
- 1997 - 『ビルマ現代絵画』『タウンレーロンから神の島へ』『国民に愛された芸術家たち』⁷⁰『母の昔語り1』出版。
- 1998 - 『83歳83の言葉』出版。83歳誕生日の会をアマラプラのタウンレーロン寺院で開催。
- 1999 - 『南アジアの窓』出版。
- 2000 - 『母の昔語り2』出版。
- 2001 - 『若き頃より馴れ親しんだ夫へ』出版。
- 2002 - 『金と武器』ヤンゴンのヨンチーチェック<信念>出版社より第2版。『煙草と人間』ヤンゴンのスイッタードー<王の兵士>出版社より第2版。『12の祭りの物売りたち』出版。

⁶⁶ マンダレーの南西11キロの地点にあり、1783年から40年間王都であった。

⁶⁷ ザンブーディーパ<閻浮提>は仏教的宇宙の須弥山の周囲にある島との意味のほか、娑婆世界との意味もある。アウントウンは男性名である。

⁶⁸ [ルードウ・ドー・アマー1994]を参照されたい。

⁶⁹ 1920年のラングーン大学第一次学生ストライキを記念して太陰暦のビルマ暦第八の月ダザウンモン月黒分10日(太陽暦の11月ごろで毎年日は変わる)に祝われる国民の祝日である。

⁷⁰ 原文のまま。1964年の著書の再版と思われる

- 2003 - 『ビルマ国内で調べた事件』ヤンゴンのティーハヤダナー<獅子の宝>出版社より第3版出版。
- 2004 - 『チンドウイン川から大海へ』マンダレーのチープワーイエー社より第2版。『虹の光』ヤンゴンのティーハヤダナー出版社より第2版。『随筆集 書店に出入りする人々考』ヤンゴンのサーオウッゼー<本市場>出版社より出版。

参考文献

ビルマ語

- Amar, Ludu Daw, 1997, "Ame She Zaga", Kyibwaye Press, Mandalay.
- 1999, "83-hnit 83-khun", Kyibwaye Press, Mandalay.
- 2007, "Ame She Zaga" Vol.3, Kyibwaye Press, Mandalay.
- Beauty(edited), 2007, "Beauty", No.94, Dec., Yangon.
- Maheti(edited), 1997/1998, "Maheti", No.157 Dec.,+Jan., Yangon.
- 2000, "Maheti", No.183, Mar. Yangon.
- 2004, "Maheti", No.229, Apr., Yangon.
- 2008, "Maheti", No.280, Apr., Yangon.
- Mi Chan Way(edited), 2005, "Ludu Daw Amr Hnit 90 Ahmattaya Zaga Sazumya", Kama Yinkwe Press, Yangon.
- Win Tint, 1995, "Ludu Daw Amar Bawa hnit Sapay Yetswemya", Kyibwaye Press, Mandalay.

日本語

- タナッカーの会, 2007, 『軍事政権を生きる女たちの声 女たちのビルマ』(藤目ゆき監修、富田あかり訳) 明石書店。
- 林よし子, 1999, 「ビルマで調査したこと」『女性・戦争・人権』第2号、行路社、pp.190-198.
- 南田みどり, 1995a, 『ミャンマー現代短編集』(編訳) 大同生命国際文化基金。
- 1995b, 「マウン・ターヤの犬たち」『世界文学』1、大阪外国語大学世界文学研究会、pp.169-211.
- 1996a, 「95年夏「ミャンマー」— アウンサンスーチー「解放」の波紋—」『世界文学』No.83, 世界文学会、pp.92-94.
- 1996b, 「寒い国から帰ってきた作家たち」『世界文学』2、大阪外国語大学世界文学研究会、pp.263-299.
- 1996c, 「ビルマ—賢女幻想の呪縛からの解放を求めて」『地球の女たち』大阪外国語大学女性研究者ネットワーク、嗟峨野書院、pp.54-63.
- 1997, 「アウンサンスーチー 孔雀は飛翔するか」『アジアの女性指導者たち』筑摩書房、pp.179-220.
- 1998, 『ミャンマー現代短編集2』(編訳) 大同生命国際文化基金。
- 1999, 「文学以前の文学事情—98年夏のビルマ事情—」『世界文学』No.89, 世界文学会、pp.106-109.

- 2000, 「1999年ビルマ文学事情—民族文学賞授与式周辺—」『世界文学』No.91, 世界文学会、pp.112-116.
- 2001a, 「2000年のビルマ—作家と作品舞台をたずねて」『世界文学』No.93, 世界文学会、pp.49-53.
- 2001b, 「ビルマ文学」『東南アジア文学への招待』段々社、pp.79-126.
- 2001c, 『ミャンマー女性短編集』(編訳) 大同生命国際文化基金.
- 2002, 「ジェンダーと女性—小説が語るビルマ女性の性と生—」『講座 東アジア近現代史6 変動の東アジア社会』青木書店、pp.217-248.
- 2004, 「2003年ビルマ断章—過去と現在のはざままで—」『世界文学』No.99, 世界文学会、pp.102-107.
- 2005, 「2004年ビルマ—混迷の風景—」『世界文学』No.101, 世界文学会、pp.89-94.
- 2006a, 「ビルマ女性はどのように語られてきたか: ビルマ女性に関する邦語文献」『アジア現代女性史』第2号、アジア現代女性史研究会、pp.112-131.
- 2006b, 「虚構をしのぐ現実の中で—2005年ビルマ—」『世界文学』No.103, 世界文学会、pp.136-141.
- 2007, 「時の流れのはざま—ビルマ報告 2006—」『世界文学』No.105, 世界文学会、pp.59-63.
- 2008, 「9月事件のあとさき—ビルマ報告 2007—」『世界文学』No.107, 世界文学会、pp.103-110.
- 2009a, 「雑誌『女性問題』に見る小説の役割について」『大阪大学世界言語研究センター論集』第1号、大阪大学世界言語研究センター、pp.113-140.
- 2009b, 「ビルマ報告 2008 もの書く人々とサイクロンのあとさき」『世界文学』No.109, 世界文学会、pp.67-83.
- 2010a, 『ティンペーミン短編集』(編訳) 大同生命国政文化基金.
- 2010b, 「短編小説の語るビルマ文学の最前線」『EX ORIENTE』Vol.17, 大阪大学言語社会学会、pp.29-58.
- 2010c, 「日本占領期におけるビルマ文学—小説の役割を中心に—」『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号、大阪大学世界言語研究センター、pp.109-136.
- 森川万智子, 2000, 「ビルマの「慰安婦」・性暴力被害」『「慰安婦」戦時性暴力の実態 II 中国東南アジア・太平洋編』緑風出版、pp.314-335.
- 2002, 「あと少しで被害者発見です ビルマ慰安婦調査 2001年12月」『草の根通信』第352号、pp.4-5.
- 2002, 「産みの苦しみでしょうか ビルマ被害者にたどりつけず」『草の根通信』第355号、pp.6-7.
- ルードウ・ドー・アマー, 1994, 『ビルマの民衆文化 語られたパゴダと微笑みの国』(土橋泰子訳) 新宿書房.
- レ・ティ・ニヤム・トゥエット, 2010, 『ベトナム女性史 フランス植民地時代からベトナム戦争まで』(藤目ゆき監修、片山須美子訳) 明石書店.

本稿は、平成 21 年度から 23 年度の日本学術振興会・科学研究補助金、基盤研究(C)「ビルマ文学史における日本占領期」における研究成果も取り入れている。ビルマ国内の文学関係者の協力にも感謝を捧げたい。